平岡昭利　著

『アホウドリと「帝国」日本の拡大―南洋の島々への進出から侵略へ―』

明石書店　2012年11月　279頁　6,000円＋税

日本の領土を地図を開いて改めて確認するならば，本州の遥か南方海上に数多くの島々が広がっており，東端として知られる南鳥島に至っては，東京から1860kmも離れた位置にある。なぜこのような遠くの島が日本の領土となっているのか，また，「鳥島」という名称の意味するところは何かについては多くの日本人が素朴に抱く問いであろう。また，近年，中国との緊張関係が続く尖閣諸島に関しては，その大半が私有地であったことに関して驚いた人も少なくないと思われる。本書はこれらの疑問に答えてくれる好著であり，結論を先取りして簡潔に述べるならば，それは，当初は日本人が羽毛を得るためアホウドリを求めて南進し，後にはグアノ・リン鉱を求めて南方の島々へ進出した結果なのである。もちろん，本書で扱われるのはこれらの島々だけではなく，大東諸島，東沙島，南洋群島，さらには北西ハワイ諸島などにまで及んでおり，近代における日本人の南方ならびに太平洋への進出・侵略の経緯が，多岐にわたる資料に基づいて詳細に明らかにされている。４部からなる本書の章構成を示すと以下の通りである。

はじめに―研究の足跡と分析視角

第Ⅰ部　アホウドリと日本人の無人島進出

1　アホウドリを求めて―「南進」への行為目的

2　マーカス島から南鳥島へ―発見から領有へ

3　アホウドリと尖閣諸島

4　羽毛輸出の拡大と鳥資源の減少

5　幻の島 中ノ鳥島の発見と領有

第Ⅱ部　バード・ラッシュと日本人の太平洋進出

1　グアノ・ラッシュとバード・ラッシュ―太平洋への日米の進出

2　ミッドウェー諸島の借り入れと主権問題

3　北西ハワイ諸島における1904年前後の鳥類密猟事件

4　バード・ラッシュ―鳥類密猟の構図と悲劇

第Ⅲ部　バード・ラッシュから無人島開拓へ
―大東諸島とその後の展開―

1　南大東島の開拓とプランテーション経営―アホウドリからサトウキビへ

2　北大東島における開拓とその後の展開―サトウキビ農業とリン鉱採掘

3　ラサ島の領土の確定とリン鉱採掘事業

第Ⅳ部　南洋の島々への進出から侵略へ
―アホウドリからグアノ・リン鉱採掘へ―

1　台湾島北部の無人島への日本人の進出―出願文書を中心にして

2　東沙島への日本人の進出と西澤島事件

3　南洋群島アンガウル島への武力進出とリン鉱争奪

おわりに

各章の末尾には小括，各部の末尾には総括が付けられており，本書の概要を知るには非常に便利な構成となっている。それらを参考に，若干のコメントを挟みながら本書の内容を紹介してみよう。

「はじめに」では本研究の出発点として，約40年前の大東諸島に関する著者の研究が回顧され，八丈島の人々は何のために遠く離れたこの島々へやってきたのか，島民は農業が目的であったと答えるが，「果たして農業をやるためだけに南大東島の垂直に切り立つ20～30ｍの断崖をよじ登るものなのか」という本書の研究の出発点となった問いが印象的に提示される。なお，ここでは問題提起だけではなく，その後の研究の経緯や従来の研究成果とともに，後述する本書の結論も示され，本書全体の要約ともなっている。

第Ⅰ部では，アホウドリをもとめて日本人が南方の無人島へ進出していった経緯や，島々での活動の実態を，小笠原諸島，鳥島，南鳥島，尖閣諸島を事例として検討しており，羽毛輸出の動向についても触れている。

アホウドリは小笠原諸島において明治初期から捕獲され，その羽毛は外国へ輸出されており，大きな利益をもたらすものであると認識されていた。アホウドリの一大生息地としてその価値が見出された鳥島（江戸時代の名称は亀島）では，玉置半右衛門がアホウドリの撲殺事業を大規模に展開し巨利を得た。その背景には当時の南進論があり，玉置は榎本武揚や志賀重昂らと深く関わり，南洋ブームの火付け役となった。当時の地図には

多くの疑存島が描かれていたが，アホウドリなどの鳥類捕獲のため，競って疑存島の探検が行われ，結果として水谷新六によって南鳥島が発見された。そして，乱獲によりアホウドリが減少したのち，南鳥島ではグアノ・リン鉱採取が行われるようになった。また，島の先占争いの影響を受け，実際には存在しない島（中ノ鳥島）の領有が明治政府によって決定されるという事態も生じた。尖閣諸島は古賀辰四郎がアホウドリを求めて進出したが，アホウドリが激減した後は，他の鳥類のはく製の製造やカツオ漁業の島へと変貌した。

アホウドリを求めて人々が，海上はるかな無人島へ進出し，撲殺事業によって絶滅近くにまで捕り尽くすさまは，凄まじいとしか言いようがない。そして，アホウドリ猟は羽毛の採取が目的であったが，羽毛の用途として，当時欧米で流行していた女性の帽子の羽根飾りが紹介されている。膨大な数のアホウドリが捕獲されていった（鳥島だけでも600万羽）ことからすると，羽毛布団としての需要も少なくなかったと思われるが，いずれにせよ，日本人をアホウドリ猟に狂奔させたのは，欧米人の贅沢な生活にあったといえよう。また，島々の開発が，貸下げないしは払い下げをうけた個人によって独占的に行われことも特徴であり，南鳥島には水谷村，尖閣諸島には古賀村が形成された。尖閣諸島は昭和初期には古賀氏の私有地となっていたのである。

第Ⅱ部では，グアノ（鳥糞）を求めて太平洋へ進出していったアメリカ人の行動を，「グアノ・ラッシュ」と表現した経済史家ジミー・M・スカッグスに倣い，日本人の行動を「バード・ラッシュ」と定義し，アホウドリを求めて日本人が太平洋進出していった様子が示される。

アホウドリの羽毛や鳥類のはく製が高価で売れることを認識した日本人は，ミッドウェー諸島をはじめとする北西ハワイ諸島へ進出した。そこでは，アメリカ側で日本との主権争いの発生が懸念され，日本人の鳥類乱獲に対する批判の世論も湧き上った。そこでアメリカ政府は，日本人の侵入を防ぐために，1903年に鳥類捕獲禁止令，さらに1909年には鳥類保護法を発布し，ハワイ諸島鳥類保護地域を設定した。しかし，それ以後も日本人による北西ハワイ諸島での密猟は続いた。この日本人の「バード・ラッシュ」の背景には，1898年に施行された遠洋漁業保護法による多額の補助金があった。また，多数の出稼ぎ労働者が南洋の島々に派遣されたが，十分な食料の供給も得られず，餓死するなどの悲劇も各地で生じた。

ここでも，アホウドリの利益に目がくらんだともいえる日本人の行動は驚くべきもので，派遣した労働者を離島に置き去りにする密猟の事業主も，生死を賭けて海のかなたに鳥猟に赴く労働者も，その心意は今日的感覚からは理解しがたいものがある。労働者には福島県信夫郡の出身者が多かったが，その事実は現在ではまったく忘れられているというのは，隠れた史実として興味深い。また，人物像の説明はされていないが，密猟のフィクサーともいうべき，愛知県の杉江常太郎とはいかなる人物であったのかも興味をそそられるところである。

第Ⅲ部では，大東諸島を事例として開拓の経緯や経営の実態が示される。

南北大東島は沖縄県の探検，ラサ島（沖ノ大東島）は，水谷新六や中村十作の探検を契機として日本の領土となったが，その後の開拓計画はことごとく失敗に終わった。南北大東島の開拓の緒を切ったのは，鳥島のアホウドリの減少に危機感をもち，新たな群生地を求めて人々を派遣した玉置半右衛門であった。しかし，アホウドリは少なく，サトウキビ栽培による農業開拓が玉置商会によって進められた。その後，玉置商会は東洋製糖に合併され，南北大東島は独占資本が経営するプランテーション経営の企業島となった。ラサ島は良質のリン鉱が豊富にあることが明らかとなり，恒藤規隆が借地権を得てラサ島燐鉱合資会社を設立し，リン鉱採掘が始まった。しかし，事業の急速な拡大によって，リン鉱資源の枯渇が懸念されるようになると，同社は新たな無人島獲得のため南沙諸島へと進出した。なお，南北大東島の所有権は，一旦は国から玉置に払い下げられ，その後，東洋製糖に転売された。その結果，玉置は莫大な資本を入手し，島民は小作人と規定された。

大東諸島は，著者の研究の出発点であり，この部分おいて，「農業をやるためだけに南大東島の断崖をよじ登るものなのか」という著者の長年の疑問は氷解したといえよう。

第Ⅳ部では，アホウドリからグアノ・リン鉱へと行為目的が変化し，同時にその行為主体が山師

的な前期的商業資本から独占資本，さらには国家へと変化しながら，日本人が南洋へ進出していった様子が示される。

日清戦争の結果，台湾・澎湖列島は日本の領土となったが，そこへもアホウドリなどの鳥類を追い求める人々がおり，無人島の借地申請が相次いだ。そして，玉置半右衛門や水谷新六はアホウドリを求めて東沙島へ進出を企てたが，その生息を確認できず，また水谷は遭難し進出を断念した。代わって進出したのが西澤吉治であり，グアノ・リン鉱採取をも考え，大量の労働者を送り込み，島は企業島（西澤島）に変貌した。その後，清国との領土問題が生じ，清国が西澤の資産を買収することで決着し，西澤島は消滅した。第１次世界大戦期には海軍は南洋諸島へ進出したが，アンガウル島のリン鉱の重要性を認識していた海軍軍務局長の秋山真之を介して，西澤吉治らは三井物産と結びつき，南洋経営組合を設立し，リン鉱採掘に着手した。しかし，アンガウル島のリン鉱輸入で打撃をうけるラサ島燐鉱会社などが，海軍と民間企業の結びつきを批判し，同島のリン鉱採掘事業は海軍直営になった。

アンガウル島のリン鉱開発の一件は，ラサ島燐鉱会社の恒藤規隆らが，シーメンス事件の余波のなかで，政治家を動かして南洋経営組合を潰しにかかったものといえ，農商務省の肥料鉱物調査所に務めていた学者肌とも思える恒藤の事業家としての生々しさがうかがえる。

「おわりに」では，本書のまとめとして，アホウドリを求めて人々が南島へ進出し，鳥資源が枯渇すると，さらに鳥を求めて遠くの島々へ進出していったこと，同時に島々へ進出の行為目的にグアノ・リン鉱の採取が加わり，それが枯渇すると，同様に遠くの島々へ進出していったこと，その結果として，「帝国」日本が空間的に拡大していったことが，図式とともに示されている。

以上のような本書の特色は，「はじめに」で著者が明確に述べているように，人間の行為目的・動機に注目して研究を進め，結論を導いている点にある。従来の地理学には，理由の視点が希薄であるという筆者の批判は，評者も同感するところであり，院生時代に地理学研究のほとんどは，「いかに」あるかを述べているものばかりという印象をもったことを思い出す。私見では，地理学研究に行為目的・動機の解明を目指した研究が少ないのは，地理学は自然地理学がベースとなっており，自然現象を研究するのと同様に（自然科学的に），人文現象を研究しようとする姿勢が伝統的にあるためと思われる。自然現象には目的も動機もないのである。ただ，本書では成功していると言えるが，目的，動機に対して満足のいく結論を得るのは難しい。たとえば，近代日本の国土空間に関しては，朝鮮半島，満洲方面への拡大も生じたが，その拡大の目的・動機を本書のように明快に説明するのは困難であろう。本書の成功のポイントは，なぜ遠く離れた小島へ人々は渡っていったのかという，本質的ながらも，結果的には解決可能な問いを発し得た点にあると思う。

本書の第二の特色は，著者も述べているように，従来，記録に残りにくく，資料に乏しいアホウドリをはじめする鳥類の捕獲という事実を，古文書，公文書，新聞，雑誌，伝記，日記，事業報告書，地図などさまざまな資料を駆使して解明している点である。結果として提示された資料の量も相当なものであるが，それらを見出すまでには，その何倍，何十倍もの資料を探索したに違いない。著者の労苦がしのばれるとともに，本書は５年や10年の研究でなし得るものではないことがよく伺え，まさに著者のライフワークの結晶といえよう。

本書の第三の特色は，このような多様な資料に見られる記述を表面的に理解するのではなく，その本音ともいえる部分に迫っていることである。通常の歴史地理学研究でも，資料批判は行うものの，本音に迫るところまでにはなかなか至らない。資料には，島々への渡航目的やその開発目的は，農業であったり，資源開発であったり，漁業であったりするが，本当の目的はアホウドリの捕獲にあったことを著者は見破っている。これは初学者にはいくら資料を調べ，並べてみても見えてこない部分であり，長年研究を積み重ねてきた著者ならではの見識といえる。このような本音を読むという著者の探究によって，南島開発や領土拡張の功労者としてみなされがちな，玉置半右衛門や水谷新六，古賀辰四郎らの負の部分が明らかにされている。その結果，彼らは顕彰されるべき人物としてではなく，営利に聡く貪欲な，あくどい

ともいえる人物として描かれていることには，異論のある人もいるかもしれないが，事実はそれに近いものであったであろう。

このような優れた特色をもつ本書であるが，最後に１つ評者から質問をしておきたい。それは欧米人，とくにアメリカ人は，莫大な利益をもたらすアホウドリをはじめとした鳥類の捕獲に関心はなかったのであろうかという点である。本書によると，マリアナ諸島がドイツ領であった際に，ドイツ人は鳥類の捕獲を行っていたようであるが（147頁），アメリカ人はもっぱらグアノにのみ関心を寄せ，鳥類の捕獲には関与していなかったようである。鳥糞であるグアノの採取という観点から，アメリカ人にとって鳥類の保護が必要であったことは理解できるが，適正規模の捕獲は考えてよい選択肢であったように思われる。あるいは，アホウドリの撲殺という，今日的な感覚からは残虐といえる行為は，アメリカ人には忌避されたということであろうか。この点について著者の教示を得たいところである。

著者は離島研究者として，また評者の関心からは近代の歴史地理研究者として，その学識の広さ，深さはつとに知られる人物であるが，スケールが大きく，事象の分析も鋭い本書の刊行によってその評価は不動のものになったと思われる。奥付の著者紹介によると，著者はすでに還暦を過ぎておられるようであるが，さらなる研究の展開を期待するとともに，研究者としての弛まぬ姿勢に評者も学びたいと思う。

（中西僚太郎）